

- 71) Renade, *ibid.*.
72) *Ibid.*
73) Kogen Misuno, "Abhidhamma Literature, *Encyclopedia of Buddhism*, Vol.1, 64-65.
74) That is to say, in the *Non-Abhidhammic* portion of the Canon, specially the Suttas. I am not referring to the canonical texts that exhibit a pre-Abhidhammic form of incipient "scholasticism", such as the Niddesa, Paṭisambhidāmagga, etc.
75) Cf. PED (PTS), s.v. *indriya*, under section A; see section B (*ibid.*) for references.
76) Cf. Ud 90.
77) See Mrs Rhys Davids, *The Birth of Indian Psychology*, London, 1937, 222.
78) Sarathchandra, 38.

Tulana Research Centre
Gonawala Rd
Gonawala-Kelaniya
Sri Lanka

Key terms: Theravāda Buddhism, Buddhaghosa, Dhammapāla, Upatissa, hadaya, kuṭi-citta, matthaluṅga, vatthu-rūpa

諸法考 —dhamma の原意の探求と再構築— (6) 法と諸法と縁起—教団の形成と発展

村上真完
(東北大学名誉教授 文博)

目次

- (1) 諸法と縁起
I インド思想における dharma (法) の意味
II 初期の仏伝資料における諸法と縁起 (以上 諸法考(1)=村上 2006: 『仏教研究』 34号, pp.63-132)
(2) 法と諸法—縁起成道から梵天勧請まで
III 縁起成道説 補説と再考
IV 梵天勧請に到るまでの世尊の言行 (Mvg.1.1-1.5) (以上 諸法考(2)=村上 2007a: 同 35号, pp.79-134)
(3) 法と諸法—初転法輪をめぐって
V 初転法輪前後の世尊の言行 (Mvg.1.6) (以上=諸法考(3)=村上 2008: 同 36号, pp.63-133)
(4) 法と諸法と縁起—教団形成の端緒をめぐって
VI 仏教教団形成の端緒 (Mvg.1.7-14) (以上=諸法考(4)=村上 2009: 同 37号, pp.91-140)
(5) 法と諸法と縁起—教団の形成
VII 仏教教団の形成 (Mvg.1.15-20) (以上=諸法考(5)=村上 2010: 同 38号, pp.79-106)

VII 仏教教団の形成 続き (大品 Mahāvagga=Mvg.1.21-22)

はじめに

前稿までに、釈尊の成道前後の縁起をめぐる観察から、最初の説法（初転法輪）を経て、仏教教団が形成される過程を見た。本稿は続いてマガダ王が帰依し、沙門教団の有力者達（舍利弗と目連とその徒衆）が入門するところまで見る。

2 象頭山における「一切（十八界：認識の全要素）は燃えている」という

説法

バラモン・カッサパ（迦葉）三兄弟の徒衆であった新弟子達とともに、世尊は成道の地（ウルヴェーラー）から北方約 10km のガヤーシーサ〔山〕（Gayā-sīsa, ⑤Gayā-śirṣa, 象頭山、伽耶山；今のガヤー南郊外の丘 Brahmayoni）に遊行して移動した後に、ここにおいて特別の教え（法）を説いたと伝えられている¹⁾。

それは「一切は燃えている」という文に始まる、認識の諸要素（眼等・色等・眼識等の十八界、及び眼等との接触とそれらを縁として生じる楽・苦・不苦不楽の感受）に執らわれてはならぬという教えである。⑩「小品」では次のように始まっている。

『(0_i) 時になるほど、世尊はウルヴェーラーに好きだけ住んでから、凡て皆元結髪行者の比丘千人からなる大比丘僧団と共に、ガヤーシーサ〔山〕（象頭山、伽耶山）の方に向かった。そこでまことに世尊はガヤーにおけるガヤーシーサ〔山〕に比丘僧団と共に住む。（Mvg.1.21.1: Vin.I. p.34¹¹⁻¹⁵）

(0₂) そこでなるほど世尊は比丘達に語りかけた。

比丘達よ。一切は燃えている。そして比丘達よ。何が燃えているのか（Sabbam, bhikkhave, ādittam. Kiñ ca, bhikkhave, sabbam ādittam）。（Mvg.1.21.2: Vin.I. p.34¹⁵⁻¹⁷）

(1)眼は燃えている。諸々の色は燃えている。眼識（眼による認識、視覚知）は燃えている。眼との接触も燃えている（Cakkhu ādittam, rūpā ādittā, cakkhu-viññāṇam ādittam, cakkhu-samphasso āditto）。凡そ眼との接触を縁として生じ感受されるこの楽・苦・或いは不苦不楽：それも燃えている（yam idaṃ cakkhu-samphassa-paccayā uppajjati vedayitam sukham vā dukkham vā adukkha-m-asukham vā tam pi ādittam）。何によって燃えているのか（Kena ādittam）。貪（貪り、貪欲）の火によって・瞋（憎しみ・怒り）の火によって・癡（迷い、無知）の火によって燃えている。生によって・老によって・死によって・諸々の愁いによ

て・諸々の嘆きによって・諸々の苦によって・諸々の不機嫌（憂）によって・諸々の悩みにによって燃えている、と〔私は〕いう（Rāgagginā dosagginā mohagginā ādittam, jātiyā jarāya maraṇena sokehi paridevehi dukkhehi domanassehi upāyāsehi ādittan ti vadāmi）。

(2)耳は燃えている。諸々の声（音）〃（Sotaṃ ādittam, saddā ādittā）。…

(3)鼻は燃えている。諸々の匂い（香）〃（Ghāṇam ādittam, gandhā ādittā）。…

(4)舌は燃えている。諸々の味〃（Jivhā ādittā, rasā ādittā）。…

(5)身は燃えている。諸々の感触（触れるもの）〃（Kāyo āditto, phoṭṭhabbā ādittā）。…

(6)意は燃えている。諸々の法（諸法、考えられるもの）〃。意識（意による認識）は燃えている。意との接触も〃（Mano āditto, dhammā ādittā, mano-viññāṇam ādittam mano-samphasso āditto）。…（Mvg.1.21.2-3: Vin.I. p.34¹⁷⁻³¹）

(x)『比丘達よ。このように見ると、有聞の聖弟子は眼に対しても厭離する。諸々の色に対しても厭離する。眼識に対しても厭離する。眼との接触に対しても厭離する。凡そ眼との接触を縁として生じ感受されるこの楽・苦・或いは不苦不楽：それに対しても厭離する。耳に対しても厭離する。諸々の声（音）に対しても厭離する。…鼻に対しても厭離する。諸々の匂いに対しても厭離する。舌に対しても厭離する。諸々の味に対しても厭離する。身に対しても厭離する。諸々の感触に対しても厭離する。意に対しても厭離する。諸々の法（諸法）に対しても厭離する。厭離すると離欲する。離欲するから解脱する。解脱すると、「解脱した」という知（自覚）がある。(y)「生は尽き、梵行は成り、なすべきことはなした。こうであること（この状態）より他にない」と悟る、と。

(z)そしてまた、この解説が語られると、その千人の比丘の心は諸々の汚れ（漏、煩惱）から解脱した。』（Mvg.1.21.4: Vin.I. pp.34³²-35³²）

この内容は、序文 (0_i) を除いて経の伝承 (S.35.28.1-10: IV.pp.19-20, 『雜阿含經』卷 8 (197): T.2, No.99, 50bc) の中にも含まれている。この中で⑩ 伝承だけが凡人における認識の諸要素（＝人間存在の全要素・全領域）の実情と、聖弟子がそのいずれにも執られずに、解脱して悟ると端的に示している。

他の諸伝承では、世尊が超能力を示す奇蹟 (iddhi-pāṭihāriya, 神足變化示現、神變示導)、他人の心を直指する奇蹟 (ādesanā-pāṭihāriya, 他心示現、記心示導)、教え誠める奇蹟 (anusāsani-pāṭihāriya, 教誡示現、教誡示導) と

れている。

そして実はこれらの一切は、どれも生ずる性質（生法 jāti-dhamma）を有し、老いる性質（老法 jarā-dhamma）を有し、滅する性質（滅法 nirodha-dhamma）を有し、無常であり、苦であり、非我である、と説かれていたのである（S.35.33-52：IV.pp. 26-30；『雜阿含經』卷8（195）（156）：T.2, No.99, 50ab）。これら眼等、色等、眼識（視覚による知覚）等、眼觸（眼と色との接触）等は、楽（快感）・苦（不快感・苦痛感）・或いは不苦不楽（快感でも不快感でもない感じ）と同じく、誰にでも実感として分かることである。こういう実感としても分かりやすいこと（諸法、即ち諸要素、諸属性）によって、我々の在りよう・在り方（生存、存在）が解明されるのである。

⑨ 經典にも超能力を示す奇蹟、他人の心を直指する奇蹟、教え誠める奇蹟という三種の奇蹟（神変、示導）を説く箇所があり、漢訳の資料もある³⁾。

しかし、仏の教えを聞いた（有聞の）仏弟子は、自分の在りよう（生存、存在）を見つめ直して、それを転換する。即ち眼等・色等・眼識等（十八界）及び眼等との接触とそれらを縁として生じる楽等の感受に対して、厭離し、離欲し、解脱すると、「解脱した」という知（自覚）があり、「生は尽き、梵行は成り、なすべきことはなした。こうであること（この状態）より他にない」と悟る、と。この1文（y）は、先に初転法輪の後の色等（五蘊）の無常・苦・非我の説法（無我相経）の末にも見た文（Mvg.I.6.46: Vin.p.I.14²⁵⁻³², S.22.59.22: S.III.p.68²¹⁻²⁶）と全く一致する定型文であり、覚りの表明である（「諸法考（3）」：『仏教研究』36号, p.118参照）。ただしこの㊦文（y）に相当する文は、『五分律』巻16（T.22.109c⁵⁻⁶）と『佛本行集經』巻42（T.3.851a⁴⁻⁵）にはあるが、他にはない。けれども、この説法を聞いた比丘達は皆、煩惱がなくなり解脱したという文（z）の趣旨は、ほぼ全ての伝承において一致する。自分の在りよう・在り方（生存、存在）をこのように分析的に把握し、そこに執らわれなければ、解脱するのである⁴⁾。

3 世尊は王舎城においてマガダ王の帰依を受ける

その後、暫らくして、世尊はこの千人の大比丘僧団と共に、マガダの都：王舎城 (Rāja-gaḥa, ㊦ Rāja-gr̥ha) の方に向かい、順次に遊行をして、王舎城に入り、〔マガダ人達の〕杖林の善住という霊樹に (Laṭṭhi-vane Suppatitṭhe cetiye, ㊦ Yaṣṭi-vane Supraṭiṣṭhite Māgadhakānāṃ caitye) に留まる (Mvg.1.22.1: *Vin.I* p.35¹⁵⁻²⁰, *CPS*.27c.1 取意)⁵⁾。

ガヤーから東北東に凡そ50kmほどの王舎城（現在の Rajgir）まで乞食・遊

行しながら行くには、5 日ほど要したであろう。「杖林の善住という霊樹」と示したところは、『四分律』巻33には、「杖林中善住尼拘律樹王」(T.22.797b⁸⁹)とあり、『衆許摩訶帝經』巻10には「杖林塔」(T.3.962c¹⁷)、『破僧事』巻7には「善住窰塔波竹林」(善住塔の竹林：T.24.135b¹)、『雜阿含經』第38(1074)には「善建立支提杖林」(T.2.279a¹⁵⁻¹⁶)、『別譯雜阿含經』巻1(13)には「善住天寺祠祀林」(T.2.377a¹⁷)とある。「杖林」(Laṭṭhi-vana, ⑤ Yaṣṭi-vana)は、王舎城域内にあった林の固有名であろうか。⑥註釈(VinA.V.972¹²)には、「椰子の公園に」(tāl'uyyāne)という。そこにあった「よく立っている」(suppatiṭṭha)という霊樹(または霊廟がある樹 cetiya)の下に、世尊が留まったという。⑥註釈(VinA.V.972¹²⁻¹³)では「或る1本の無花果の樹の下に(vaṭa-rukkhe)」という。漢訳に塔、塔廟(支提)、寺というのは、後の解釈なのであろうか。ここでは明記がないが、世尊はマガダ王を教化することを意図していたはずである。ここの伝承は阿含の伝承にも含まれるのである。

【α 世尊の風評・評判とマガダ王の対応】

世尊の動向や名声は、予想通りマガダ王セーニヤ・ビンビサーラ(Māgadha Seniya Bimbisāra, 摩竭提王瓶沙、頻婆娑羅王、頻毘娑羅王)が聞き知るところとなる。

⑥伝承では、その名声とは、次のような定型文で語られる。

『(a) かの世尊は、供養(尊敬)に値する方(阿羅漢、応供)である。正等覺者、明知と行をそなえた方(明行足)、よく行かれた方(善逝)、世間を知る方(世間解)、無上の方(無上士)、人を調御する御者(調御丈夫)、神々と人々の師(天人師)、仏、世尊である(so bhagavā araham sammā-sambuddho vijjā-carāṇa-sampanno sugato loka-vidū anuttaro purisa-damma-sārathi satthā deva-manussānaṃ buddho bhagavā)。

(b) その方は神を含み魔を含み、梵天を含むこの世間に、沙門やバラモンを含む・神々と人間を含む生類に、自ら証知して体験して〔それを〕説く。その方は、初めもよく中ほどもよく終わりもよい・意味そなわり文言そなわった教え(法)を説く。全く円満し清浄な浄行(梵行)を明らかにする。

そして、いいかね。そのような阿羅漢たちに会うことはよいことだよ、と。』(Mvg.1.22.2: Vin.I. p.35²⁵⁻³⁴)

この定型文の(a)は、いわゆる如來の十号であり、如來(仏)の十種の形容語であり、(b)は仏が説く法(教え)と浄行(修行、梵行)の形容であり讃美である。この⑥伝承は、確かに世尊とその教え(法)の形容と讃美に尽きるが、ともに定型化されており、他の諸伝承ともほぼ共通するものである⁹¹。

⑥伝承は、このように世尊を讃美する風評を語る。根本説一切有部の伝承では、釈迦族に生まれた太子が、占い師の言によれば、太子が家にあれば転輪王となり、出家すれば正覺者となると聞いた人民が、王に報告して彼(太子=世尊)の殺害を進言する。王はそれを退けて、彼が転輪王になるなら彼に従い、彼が正覺者になるなら、親しく供養しようという願望を懐く。また別の人々はその世尊が今や正覺者となりガヤー山に住んでいることを伝えて、かの仏・世尊の供養を進言する。王は臣下に命じて、王の名代として世尊を訪ねて王舎城への來臨を請わせる。こうして世尊は僧団とともに遊行して王舎城に入り、城外の杖林の善住霊樹に留まっておられる。そしてそれを王は聞き知ったのである⁷¹。

また『四分律』巻33(T.22.797b)、『五分律』巻16(T.22.109c)、『過去現在因果經』巻4(T.3.650b¹³)では、世尊が嘗て王に会って、成仏後に再訪を約束したことを思い出して、王に会うために王舎城に赴いたという⁸¹。

『スッタ・ニパータ(Sn.)』3.1「出家經」では、世尊が修行中に王舎城に行乞に入ったのをこの王が見て、訪ねて行って対話を交わし財物を提供して懐柔しようとするが、世尊は欲望を求めず修行に励もうと答えている。法蔵部の『四分律』巻31(T.22.779c²²-780b⁶)の外、根本説一切有部(SBV.I.pp.94⁸-96¹⁶、『破僧事』巻4：T.24.118b¹⁸-119a¹⁹, cf. 『衆許摩訶帝經』巻5：T.3.947c²²-948a²⁰)や大衆部(Mv.II.p.198³-202²)の伝承では、この時に王は世尊が覺りを得た際には再来を請うたのに対して、世尊が応諾されたという。⑥の註釈(Pj.II.p.986)にも、「尊師よ。仏となることを得ましたら私の所領においてください」と、王が菩薩(=世尊)に言った、と伝えている⁹¹。

⑥伝承では、マガダ王は、12万のマガダ人のバラモン・家主達に囲まれて世尊のもとに近づいて、挨拶して一方に坐った。バラモン・家主達も銘々に世尊に挨拶して一方に坐った、という(Mvg.1.22.3: Vin.I.pp.35³³-36⁷ 取意)¹⁰。

この12万人とは、随分と大袈裟な表現であり、銘々に世尊に挨拶をするというのは、実は精々数十人であることを暗示しているかのようである。

【β 世尊とカッサパとの偈の応答：カッサパの帰依の心情】

さて人々は大沙門(=仏)とカッサパとのどちらが師か、どちらが弟子か、と迷う。すると、人々の思いを世尊は心で知って、彼に詩句をもって語りかけ

る。

『a「ウルヴェーラーに住む者よ。瘦せた論者（貴方）は何をば見て祭火を捨てたのか。K.（カッサパ、迦葉）よ。この意味を貴方に問う。どうして貴方の祭祀りが捨てられたのか。」と。

Kim eva disvā Uruvela-vāsi, pahāsi aggim kisako vadāno;
pucchāmi taṃ Kassapa, etam atthaṃ kathaṃ pahinaṃ tava aggi-
huttan ti.

b [K.]「色と声とそれから味、欲しいもの、そして女を、供犠は語る。これは垢だと、〔執着の〕依り所（=祭祀）の中に知って、それ故に祭祀や献供を喜ばない。」と。

rūpe ca sadde ca atho rase ca; kām'itthiyo cābhivadanti yaññā;
etaṃ malan ti upadhisu ñatvā; tasmā na yiṭṭhe na hute arañjin ti.
(Mvg.1.22.4: Vin.I.p.36¹⁵⁻²¹)

c [世尊]「またここに貴方のところは、色と声とそれから味に喜ばない。K.よ。」と世尊は言うた。

「すると今や神々や人々の世間において、ここは何が楽しいのか。K.よ。私にそれを言え。」と。

ettha ca (^{vi}ettheva) te mano na ramittha Kassapā ti bhagavā avoca
(^{vi}bhagavā); rūpesu saddesu atho rasesu;

atha ko carahi deva-manussa-loke; rato mano Kassapa, brūhi me tan
ti.

d [K.]「執着の依り所のない寂静なる境地を見て、無所有にして欲の生存に執らわれない・別様にはならない・他によっては導かれぬ〔境地を見て〕、それ故に祭祀や献供を喜ばなかった。」と。

disvā padaṃ santam anūpadhikaṃ; akiñcanaṃ kāma-bhave
asattaṃ;

anaññathā-bhāvim anañña-neyyaṃ; tasmā na yiṭṭhe na hute arañjin
ti. (Mvg.1.22.5: Vin.I.p.36²²⁻²⁹)

するとカッサパは、座から立ち上がって世尊の足下に頭をつけて申し上げた。

『尊師よ。世尊は私の師です。私は弟子です。』（Vin.I.p.36³²⁻³³）

と。こうして人々に実情が分かったのである。この四偈は、仏の問いに答える形で、カッサパが仏に心服するに至った経緯と、祭祀と火への献供を捨てて仏の教えに喜ぶに至った心境を簡潔に示している。これら四偈は、ほぼ全ての伝承に含まれるが、語彙や語尾、語順の少なからぬ相違が見られる。偈数がもっ

と多い伝承もある。有部系統ではさらに三偈を加えるが、他の三律（『四分律』、『五分律』、『毘尼母經』）では上と同様の四偈である。Mv. はこれに六偈を加えるが、最後の二偈は他に類例がない¹¹⁾。『中本起經』卷上には、仏が述べたのは二偈（五言八句）である。これが古形を示すのかどうかは、即断できない¹²⁾。

【γ 世尊の説法】

そこで世尊は、彼等の心の思いを知って、次第説法を語り、布施の談義、戒の談義、天の談義等を始めとして、彼等が浄らかな信ずる心を持つようになったのを知ったときに、苦・集・滅・道（四諦）を説き明かした。すると11万人には、「およそ何でも集起する性質（本性、法）があるものは、すべて滅する性質（本性、法）がある」という遠塵離垢の法眼（真実を見る汚れのない無垢の眼）が生じ、1万人は信者（優婆塞）になると申し出た（Mvg.1.22.6-8: Vin.I.pp. 36³⁰-37¹³取意）¹³⁾。

この世尊の説法を人々が了解して法眼が生じたという段は、ヤサの場合（Mvg.1.7.5-6: Vin.I.15³⁵-16⁸）と同文で繰り返されてきた。遠塵離垢の法眼という語句はほぼ全ての伝承にある。けれどもその意味が、縁起による集（生）と滅とを知ることであるという例は、⑨の伝承では繰り返されるが、他の伝承には極めて少ない。けれども『佛本行集經』卷36、44（T.3. 819c²¹⁻²³, 858b^{28-c1}）が、ほぼ同様の文句を伝えている¹⁴⁾。

【δ マガダ王の願い、帰依、食事供養の申し出】

すると王は

『法を見、法を得、法を知り、法に深く入り、疑いを超え、惑いを離れ、確信を得、師の教えに関して他には依存しないで、世尊にこう申し上げた。』

(Mvg.1.22.9: Vin.I.p.37¹⁴⁻¹⁷)¹⁵⁾。

この法とは、仏の教えの内容であり、いわば真実であり、四諦の理、縁起の理である。この文も最初に法眼を得たコンダンニャ（=Mvg.I.6. 32: Vin.I.p. 12¹⁹⁻²²）や、ヤサの父（Mvg.I.7.10: Vin.I.p.16³⁰）の場合等と同文である。

さて王の言うところは

『尊師様、私が王子であったときに五つの願い事（assāsaka）が有りました。それが今や私に満たされました（samiddha）。』（Vin.I.p.37¹⁷⁻¹⁸）

というのである。すなわち

(1)『あまことに〔皆が〕私を王位に即けてくれますようにと（rajje abhisiñceyyun ti）。』

(2)『そしてその私の所領に供養に値する（阿羅漢）正等覚者がお出でに

なりますようにと。』

(3) 『そして私がその世尊に近侍できますようにと (payirupāseyyan ti)。』

(4) 『その世尊が私に教え (法) を示して下さいようにと (dhammaṃ deseyyā ti)。』

(5) 『そして私がその世尊の教え (法) を了解できますようにと (dhammaṃ ājāneyyan ti)。』

この五つの願い事が叶ったという (Mvg.I.22.9-10: Vin.I.p.37³⁵⁻³⁹)¹⁶⁾。

そして王は、ヤサの父 (Mvg.I.7.10: Vin.I.p.16³¹⁻³⁸) と同じ様に、言上する。

『尊師よ。すばらしいことです。・・・世尊は、多くの方法を用いて、法 (教え) を明らかにして下さいました (dhammo pakāsito)¹⁷⁾。

この私は世尊 (仏) に帰依し、法 (仏の教え) と比丘僧団に [帰依します]。世尊はどうぞ今日より以後、私を命ある限り帰依している信者 (優婆塞) としてお認めおき下さい、と。』 (Mvg.I.22.11: Vin.I.p.37³¹⁻³⁸)

『また尊師よ。世尊は明日には私の食事を比丘僧団と共に [食べることを] 認めて下さい、と。』 (Vin.I.p.37³⁸-38¹⁾)

世尊は沈黙をもって認めた。それを知って王は座を起って世尊に挨拶して右繞して立ち去った¹⁸⁾。そしてその夜が過ぎると、王は素晴らしい食事を用意させて、世尊に「尊師よ、時間です。食事が出来ました」と時間を知らせた。世尊は午前中に着衣して鉢と衣を持って大比丘僧団と共に王舎城に入った。そのとき帝釈天はバラモン学生の姿を化作して、次の詩歌 (偈) を歌いながら、仏を上首 (筆頭) とする比丘僧団の前へ前へと行く。

『I 「[身を] 修め (調御し) 執らわれない (離脱した) 金環のように金色の世尊は、[身を] 修め (調御し) 執らわれない (離脱した) 元結髪行者達と共に王舎城に入られた (danto dantehi saha purāṇa-jaṭilehi, vippamutto vippamutthehi; siṅgī-nikkha-suvaṇṇo (^{Vn} -savaṇṇo), Rājagahaṃ pāvīsi bhagavā)。

m 開放され (解脱し) 執らわれない (離脱した) 金環のように金色の世尊は、開放され (解脱し) 執らわれない (離脱した) 〃 (mutto mutthehi saha purāṇa-jaṭilehi, vippamutto vippamutthehi; 〃)。

n [生死を] 渡って執らわれない (離脱した) 金環のように金色の世尊は、[生死を] 渡って執らわれない (離脱した) 〃 (tiṇṇo tiṇṇehi saha purāṇa-jaṭilehi; vippamutto vippamutthehi; 〃)。

o 安らかにして執らわれない (離脱した) 金環のように金色の世尊は、安らかにして執らわれない (離脱した) 〃 (santo santehi saha purāṇa-

jaṭilehi; vippamutto vippamutthehi; 〃)。

p 十 [聖住] に住し、十力有り、十法を知り、十 [無学支] を具え¹⁹⁾、千人の従者を伴って、かの世尊は王舎城に入られた。』と

(dasa-vāso dasa-balo, dasa-dhamma-vidū dasabhi c'upeto; so dasa-sata-parivāro Rājagahaṃ pāvīsi bhagavā ti)。』 (Mvg.I.22.13: Vin.I.p.38¹⁵⁻²³)

これは、世尊が元結髪行者の比丘達とともに王舎城に入ったという様子を、同じ語句を繰り返して述べつつ、世尊と比丘達の形容と讃美を語る。人々は帝釈天を見て、この美しいバラモン学生は誰の子か、と言い合う。帝釈天は偈で答える。

q 「『賢者にして凡てに亘って [身を] 修め (調御し) 清浄にして比肩する人なく供養に値する (阿羅漢) 善く行ける (善逝) というそのお方に、私は従う者です。』と (yo dhiro sabbadhi danto, suddho appaṭipuggalo; araham sugato loke, tassāham paricārako ti) 』。(Mvg.I.22.14: Vin.I.p.38²⁹⁻³⁰)

帝釈天というのは、私には理解できないが、この話を伝えた人達には、そう思われたことなのであろうか。なお以上の六偈に対応する伝承は少ない²⁰⁾。

【ε マガダ王の竹林園寄進】

さて世尊はマガダ王の住いを訪ね、比丘僧団とともに設けられた席に坐った。王は手ずから立派な硬軟の食べ物をもって、仏を始めとする比丘僧を満足させて、世尊が食べ終えて鉢から手を放したのを見て一方に坐った。そして世尊がどこに住まうとよいのか、と思案する (Mvg.I.22.15-16: Vin.I.p.38³¹-39⁷ 取意)。そして王はこう思う。

『私共の竹林園 (Veḷu-vana) は、なるほど、村から決して遠からず近過ぎず行き来が出来て、それぞれ求める人達に行き易く、昼には混雑少なく、夜には人声が少なく物音も少なく、人々の気配なく (vijana-vāta) 人々が独住すべく、独坐にふさわしい。さあ、私は仏を上首 (筆頭) とする比丘僧団に寄進しましょう、と。』 (Mvg.I.22.17: Vin.I.p.39⁸⁻¹⁴)

王は黄金製の水瓶を取って、[寄進のしるしに] 世尊 [の手] を清めさせて、『尊師様。この私は仏を上首とする比丘僧団に竹林園を寄進いたします』という。世尊は受けられた。すると世尊は、王に法話をもって教示し、受持させ、励まし喜ばせてから、座を立てて立ち去られた。最後に

『するとなるほど、世尊はこの因縁でこの機会に法話をしてから、比丘達に語りかけた。「比丘達よ。園林を許します」と。』 (Mvg.I.22.18:

*Vin.I.p.39*²¹⁻²²)

この仏のことで、ここの1幕は終わる²¹⁾。

ここは元結髪行者のカッサパとその徒衆が仏弟子の大比丘僧団となったことを、マガダ王と大衆の前で見せ付けてから、王と大衆に説法し、その後で王より竹林園を住居地として寄進されるという一段である。散文と韻文からなるが、諸伝承の間に相違するところも多い。

VIII 仏教教団の形成と発展 (大品 Mahāvagga=Mvg.1.23-24)

沙門教団の二有力者：舍利弗・目連とその徒衆の入門

a 【サンジャヤの論法】

その頃サンジャヤ (Saṅjaya, Vri.Saṅcaya) という遊行者が、250人の大遊行者衆 (paribbājaka-parisā) とともに、王舎城に住んでいる。時に舍利弗 (Sāriputta, Śāriputra) と目連 (目犍連 Moggallāna, Maudgalyāyana) とは遊行者サンジャヤの許で修行 (梵行) をしていて、『凡そ最初に不死 (amata) を得達したものは、他方に告げよ』と約束 (katikā) を交わしていた (Mvg.I.23.17: *Vin.I.p.39*²³⁻²⁸要旨)²²⁾。

このサンジャヤ (Saṅjaya Belaṭṭhi-putta, Vri. Saṅcaya Belaṭṭha-putta, ⑤Samjayin Vairāṭi-putra) は、漢訳に外道六師または六師外道という沙門と呼ばれた著名な六人の思想家の一人で、形而上学的な諸問題を問われると判断を避ける答弁をしたと伝えられる。⑥伝承では彼が取り上げる問題とは、

(1) 「あの世 (他の世界) はあるのか (atthi paro loko)」、「あの世は無いのか (n'atthi paro loko)」、「あの世はあり、かつ無いのか (atthi ca n'atthi ca paro loko)」、「あの世はあるのでもなく、無いのでもないのか (n'ev'atthi na n'atthi paro loko)」

(2) 「化生の有情達はあるのか (atthi sattā opapātikā)」、「無いのか (n'atthi sattā opapātikā)」、「あり、かつ無いのか (atthi ca n'atthi ca sattā opapātikā)」、「あるのでもなく、無いのでもないか (n'ev'atthi na n'atthi sattā opapātikā)」

(3) 「善行悪行の業の報いはあるのか (atthi sukata-dukkatāṇaṃ kammāṇaṃ phalaṃ vipāka)」、「無いのか (n'atthi ")」、「あり、かつ無いのか (atthi ca n'atthi ca ")」、「あるのでもなく、無いのでもないのか (n'ev'atthi na n'atthi ")」

(4) 「如来 (修行完成者) は死後にあるのか (hoti tathāgato param

marañā)」、「無いのか (na hoti ")」、「あり、かつ無いのか (hoti ca na ca hoti ")」、「あるのでもなく、無いのでもないのか (neva hoti na na hoti ")」 (*D.I.pp. 58*²⁴⁻⁵⁹)、

というもので、恐らくは全て人の死後の存在をめぐる問題であろう。それは、あの世 (他の世界)、死後に天や地獄に化生して生まれるという有情、善行悪行の業の報い、如来 (修行完成者) の死後の存在という4種の問題が問われるのであり、しかも、それぞれが4種の判断の選択肢に分かれ、都合16問となっている。彼の言い方・答え方、つまり論法はこうである。

『「あの世 (他の世界) はあるか」ともし私に [貴方が] 問うならば、「あの世 (他の世界) はある」ともし私に思えるならば、「あの世 (他の世界) はある」と貴方のその [問いに] 答えるであろう。[しかし] そうとも私には思えない。そうであるとも私には思えない。そうではないとも私には思えない。ないとも私には思えない。ないのではないとも私には思えない (atthi paro loko ti iti ce maṃ pucchasi, " ce me assa, " te naṃ byākareyyaṃ. Evan ti pi me no, tathā ti pi me no, aññathā ti pi me no, no ti pi me no, no no ti pi me no)。』 (*D.I.p. 58*²⁴⁻²⁷)

と。以下の15問の全てについても、上と同じように述べるという (*D.I.pp. 58*²⁸⁻⁵⁹)。最初に上に示したのは、その問いだけを抽出して列挙したのである。ここで感官によっては確認しがたい事柄 (主語) についての、有・無・有無・非有かつ非無という4種の判断 (四句分別) は特徴的である。まず確認できない事柄 (主語) についての肯定・否定・肯定かつ否定・非肯定かつ非否定という4種の判断である。思うに判断は1種であってこそ明解なのであって、2種以上の判断があればどれが真か偽かという論争が避けられない。上のような4種の判断と5種の否定とは全体としてどういう意味を持つのか、容易に分らない。ただ上のように凡そ考えられる全ての判断と、否定の可能性を全て言い尽くした、この論法の発見は重要であろう。これをもってあらゆる判断とそれに対する否定の可能性の全てを挙げ切っているからである。サンジャヤはその一々に対して「そうとも私には思えない…」と5種の否定文で応じるだけで、饒舌にも拘わらず、全てを否定するので判断停止になり不可知論にもなる。

b 【サンジャヤ説：不可知論 (無限混乱論、鰻のように捉え難い混乱論)】

仏教興起の頃の形而上学的異説 (異見) は、仏によって (実は仏弟子達によるのかも知れないが) 六十二見の名の下に整理され論評されて伝えられている (*D.i Brahmajāla-sutta 1.28-3.32*, 『長阿含經』21梵動經、支謙譯『梵網六十二見經』)。我 (靈魂) と世界を主題とする諸説は、整理し直して過去に関する

18説と未来に関する44説とに纏められる。過去に関する説の第4の詭弁論の第4説が、上のサンジャヤの言と全く同じである(D.I.p. 58²⁴⁻²⁷)。木村泰賢以来、詭弁論(詭辯論)というその原語 amarāvikkhepa が難解であり、伝承では「無限混乱[論]」と、「鰻のように捉え難い混乱[論]」という、2種の解釈がある。すなわちブッダゴーサの⑨註釈はまず、第一の解釈を示す。

『死なないというのが不死の[見解]である。それは何か。[その]執見を持つ者には、「そうとも私には思えない」というなどの趣旨によって、際限がない見解及び言葉がある。種々なる散乱という混乱がある。不死の(限らない)見解と言葉との混乱というのが不死混乱である(na marati ti amarā. Kā sā? Evan ti pi me no-ti-ādinā nayena pariyanta-rahitā diṭṭhi-gatikassa diṭṭhi c'eva vācā ca. Vividho khepo ti vikkhepo, amarāya diṭṭhiyā vācāya ca vikkhepo ti amarā-vikkhepo)。』(DA.I. p.115¹²⁻¹⁵)

と。ここの「不死の」という語が、「際限のない」(pariyanta-rahitā)という意味であるという。ダンマパーラに帰せられる複註(DA-ṭīkā Linatthavaṇṇanā, または Linatthappakāsanā, Linatthappakāsaṇi とともいう)には

『死なないというのは、断滅しない(=断ち切れない)(Na marati ti na cchijjati)。』(PTS. ed. I.212¹², Vri.I.143)

とある。「断ち切れない際限のない見解と言葉との混乱(散乱)」、「無限混乱[論]」であろう。不死の意味を読み込んで「不死混乱[論]」というなら、不死矯乱論(⑩amarā-vikṣepa-vāda, 『瑜伽師地論』巻6, 7, 58, 87: T.30.303c⁵, 310b²³, 621c¹, 785c¹⁷, 786a¹⁶)という玄奘訳にも通じる²³⁾。

しかしその意味は明確ではない。⑨註釈は他にアマラーを鰻と解して

『別の解釈法がある。アマラーとは一種の魚(鰻)であり、それは浮かんだり沈んだりすることによって水中で走り回るから、捕らえることが出来ない、という。このようにこの論も、ここから、ここからと走り回るから捕らえるに至らない。故に鰻混乱[論]と言われる(aparo nayo — amarā nāma ekā maccha-jāti, sā ummujjana-nimujjanādi-vasena uduke sandhāvamānā gahetuṃ na sakkā ti, evam eva ayam pi vādo ito c'ito ca sandhāvatī, gāhaṃ na upagacchatī ti amarā-vikkhepo ti vuccati)。』(PTS.DA.I.115, Vri.I. 98)

ともいう。これは鰻のように迷走し捉えどころのない議論を意味し、いわば「鰻混乱[論]」、「鰻のように捉え難い混乱[した議論]」であろう。では「無限混乱[論]」はどうか。サンジャヤ(詭弁論者)は4種の争点について各4

種の判断(4句分別)を立てて、そのどれについても、「そうとも私には思えない…」云々と5種の言い方で否定するが、回答は無限ではない。しかし問う者にとっては疑問・混乱・不満の余地が限りないであろう。同様にその真実が把握し難い「鰻のように捉え難い混乱[論]」、鰻混乱[論]でもあろう。その論法が、次のような仏の言葉を冠して示される。

『比丘達よ。ここに一部の沙門或いはバラモンは遅鈍で愚鈍であり、彼は遅鈍であるから愚鈍であるから、そこかしこで問いを問われているとすると、言葉の混乱である無限混乱[論](鰻混乱論)に陥る(Idha, bhikkhave, ekacco samaṇo vā brāhmaṇo vā mando hoti momūho (^{Vri}momho). So mandattā momūhattā tattha tattha pañhaṃ puṭṭho samāno vācā-vikkhepaṃ āpajjati amarā-vikkhepaṃ)。』(PTS.D.I.p. 27⁷⁻¹¹, Vri.I.23)

と。そしてその最後には

『比丘達よ。これが第四の根拠であって、それに基づきそれに依って鰻のように混乱する或る沙門・バラモン達が、そこかしこで問いを問われているとすると、言葉の混乱である無限混乱[論](鰻混乱論)に陥る(Idaṃ, bhikkhave, catutthaṃ ṭhānaṃ, yaṃ āgamma yaṃ ārabha eke samaṇa-brāhmaṇā amarā-vikkhepikā 〃)。』(D.I.p.27³²⁻³⁵)

と断定している。ここの文型は仏がサンジャヤの言を、再構成して不可知論(無限混乱論、鰻のように捉え難い混乱論)という枠を設けて、その中に嵌め込んだような形である。六十二見とは、当時の諸宗教哲学説を仏が(仏教教団内で)改めて整理し体系化した形のように見える。それに対して先に触れたサンジャヤ説を始め六師外道説は、マガダ王(阿闍世 Ajātasattu)が把握した内容の報告の形として伝えられている。

サンジャヤは、死後の問題に対する形而上学的な問題に明確な返答を避けるべく注意の行き届いた論法を繰り出す。原始仏典の伝えるところでは、このような形而上学的な問題に対しては、仏は「答えない(無記、不記 avyākata)」という回答をしたという。それはサンジャヤ(不可知論者)の饒舌な回答を簡明に改めた形のように見える。しかし善悪の業の報いには仏は多く言及する。

このような異説に対処する仏の態度について、石飛道子『ブッダと龍樹の論理学』(株式会社サンガ、東京、2007年、p.177)、『龍樹と語れ』(大法輪閣、東京2009年、p.86)は、「論争してはならない」、「論争するな」という視点を発見している。確かに今のような問いに対しても、賛否を明言せず、「答えられない(無記、不記)」と言って済ます分には、論争にも及ばないし、相手を

怒らせることもあるまい。

仏には相手を怒らせるような言葉はない。多くの經典の末尾には、仏の言葉を聴いて皆が歓喜したと伝える。既に見たように、仏がカッサパ（迦葉）を教化した過程についての諸伝承には、決して相手を不快にさせず、怒らせないで、急がずにゆっくりと十分に時日をかけて、相手が仏の教えを受けたくなるのを待っていたのである。相手を喜ばせるのが、仏の説法の特徴でもあった。

また相手の主張に対して、賛否をもって答えないことは、相手を怒らせないだけではない。相手の用語法に縛られる無用な論争に巻き込まれる争いを避ける。しかも、もし適当な機会を得れば、論者の主張を超える自身の立場を自分の用語をもって懇切丁寧に解き明かし教える余地を確保することにもなる。

仏自身の立場において、語られる事柄の全領域（一切という）は、五感と意（六根、六内処）とそれらの対象（六境、六外処、合わせて十二処という）であり、または眼識、乃至、意識の六識（知覚、感官知）を加えた18種からなる認識の諸要素（十八界）を出ることにはないのである。このように知覚に基づき実感から出発して、自分の在りよう・在り方を明確に語る。これら（十二処、十八界）のどれもが、無常であり、苦であり、非我であると覺り、それらに執られなければ、解脱して悟ると教える。しかし感官知の及ばない・実感できない主題をあげつらう命題や問いには、賛否（Yes, No）を問われても、答えられない（無記）というのである。

このような論法に詳しい師匠の許で学んだという舍利弗と目連とがその徒衆と共に入門したことは、仏教の発展にも大きな影響があったと想像される。

c 【舍利弗がアッサジ尊者に遇い縁起法頌を聞いて離垢の法眼を得る】

α 『時になるほど、アッサジ尊者が午前中に着衣して鉢と衣をもって王舍城に乞食に入った。進むにも退くにも、前を見るにも脇を見るにも、身を曲げるにも伸ばすにも端正であり、眼線を下に落とし、威儀のあり方が具わっていた。』(Mvg.I.23.2: Vin.I.p.39²⁸⁻³⁵)

それを遊行者舍利弗が見て、その姿勢・威儀が端正であるのに感銘を受けて、誰の弟子であるかを問おうと思う。しかし舍利弗は、今は問い尋ねる時ではないと思って、彼の後をつけて、彼が托鉢食を持って帰ってくるのに近づいて挨拶をして、一方に立って、言う。

Ś₁ 『まあ、友よ。貴方のお顔は明るく澄み切っています。肌の色も清らかで美しく白い。友よ、貴方は誰を〔先生と〕さだめて出家したのですか。また貴方の先生は誰ですか。また貴方は誰の教え（法）を信奉しているのですか』と。』(Mvg.I.23.3: Vin.I.p.40¹³⁻¹⁶)

この讃美と問いの文言は、初転法輪の前に世尊に出会ったアーjeeヴィカ派の行者が語る言葉（Vin.I.p.8¹³⁻¹⁵）に等しい（「諸法考(3)」p.69）。

α₁ 『〔アッサジ〕「友よ。大沙門です。釈迦の息子で釈迦家から出家した方です。私は世尊を〔先生と〕定めて出家したのです。そして世尊は私の先生です。また私は世尊の教え（法）を信奉しているのです」と（tassa cāhaṃ bhagavato dhammaṃ rocemī ti）。

Ś₂ 〔舍利弗〕「また尊者の先生は何を語り、何を説くのですか」と（kimvādi panāyasmato satthā, kim-akkhāyī ti）。

α₂ 〔アッサジ〕「私はね。友よ。出家して間もない新米で、この法（教え）と律（僧団の決まり）に今入ったのです。私は貴方に詳細に法（教え）を説くことが出来ません。ですが貴方に簡略に意義を言いましょう」と（adhunāgato imaṃ dhamma-vinayaṃ, na tāhaṃ sakkomi vitthārena dhammaṃ desetuṃ, api ca te saṃkhittena atthaṃ vakkhāmi ti）。

舍利弗はアッサジ尊者に言った。

Ś₃ 『「よろしい。友よ。少し或いは多く語られよ。意義だけを私に言いたまえ（atthaṃ yeva me brūhi）。

意義だけに私には意味がある。多くの文言をもって何をなしますか」と（atthen' eva me attho, kim kāhasi byañjanaṃ bahun ti）。』(Mvg.I.23.4: Vin.I.pp.40¹⁶⁻²⁵)

アッサジ尊者は舍利弗にこの法門を説いた（dhamma-pariyāyaṃ abhāsi）。

α₃ 『およそ諸々の法（自分の心身の諸要素・属性）は因より生ずる、それらの因を如來は説いた。また大沙門はそれらの滅もまたそのように説く（ye dhammā hetu-ppabhavā tesaṃ hetuṃ tathāgato āha ; tesaṃ ca yo nirodho, evaṃ-vādi mahā-saṃaṇo）。(Vin.I.p. 40²⁸⁻²⁹)

Ś₄ するとなるほど、遊行者舍利弗にはこの法門を聞くと、「およそ何でも集起する性質（本性、法）があるものは、すべて滅する性質（本性、法）がある」（yaṃ kiñci samudaya-dhammaṃ, sabbhaṃ taṃ nirodha-dhamman）という遠塵離垢の法眼（真実を見る眼）が生じた。〔そしていわく〕

Ś₅ 「もしそれだけだとしても、これは真実（法）です。多くの万劫を過ごしても見られない無憂の境地に〔あなた方は〕到達されたのです」と。』(es'eva dhammo yadi tāvad eva, paccavyathā^(vi) paccabyattha) padam asokaṃ; adiṭṭhaṃ abbatthaṃ, bahukeyhi kappa-nahutehi ti. Mvg.I.23.5: Vin.I.pp. 40³³⁻³⁴)

初転法輪の際には、四諦の説法を聴いたコンダンニャに、『「およそ何でも集起する性質（本性、法）があるものは、すべて滅する性質（本性、法）がある」という遠塵離垢の法眼（真実を見る眼）が生じた』とあった（*Vin.I.p.11*³⁴⁻³⁶）が²⁴⁾、それと同文である。その内容を考えるに、アッサジが示したという α_3 の偈（縁起法頌、法身偈）の趣旨とほぼ等しい。ここの諸々の法（諸法）とは、すでに解してきたように自分の生存の諸要素・諸属性であり身心（心身）の諸要素・諸属性であり、それらは縁起の関係によって成り立ち、また滅すべきものである。

d 【目連も舍利弗より縁起法頌を聞き法眼を得る】

舍利弗は目連を訪ねる。目連は彼を見て言う。

『「ね、友よ。君の顔は明るく澄み切ってる。肌の色も清らかで美しく白い。友よ、君は不死を得たのか」と。

〔舍利弗〕「そうだよ。友よ。不死を得たのだよ」と。

〔目連〕「では友よ。どのようにして君は不死を得たのか」と。』

（*Mvg.I.23.6: Vin.I.p.41*¹⁻⁵）

こうして舍利弗は目連に一部始終を語り縁起法頌まで語る（*Mvg.I.23.7-10: Vin.I.p.41*⁵⁻³⁶）。それを聴くと目連にも舍利弗と同様に法眼が生じ同じ言葉を発する（*Mvg.I.23.10: Vin.I.pp.41*³⁷⁻⁴²）。

e 【舍利弗と目連が弟子衆と共に師のサンジャヤと決別する】

目連は「世尊の許に行こう」とするが、兩人に依存して住している250人の遊行者にも諮ってみよう（*apalokāma*,^{Vri}*apalokema*）ということになる。こうして皆が大沙門の許で修行（梵行）を行おうということになる（*Mvg.I.24.1: Vin.I.p.42*⁶⁻¹⁷）。

次に二人はサンジャヤを訪ねて「友よ。私共は世尊の許に参ります。かの世尊は私共の師です」という。彼は「友よ。止めよ。行くな。三人皆が徒衆を世話しよう」と反対する。二人は三遍繰り返して三遍反対されるが決別する（*Mvg.I.24.2: Vin.I.p.42*¹⁷⁻²⁷）。

f 【舍利弗と目連が仏門に入り出家受戒する】

兩人は250人の遊行者と共に竹林に近づく。サンジャヤ遊行者にはその場でその口から熱血が出た（*uṇhaṃ lohitaṃ mukhato uggañchi*）。世尊は兩人が遠くからやって来るのを見て比丘達に語る。

『「比丘達よ、これら二人の友：コーリタ（目連）とウパティッサ（舍利弗）とがやって来る。これは私の両弟子：最高の両賢者となるであろう。

甚深の智の対象において執着の依処の無上なる滅尽において解脱した

兩人が竹林に着くや（^{Vri}着かぬのに）、時に〔大〕師は彼等について予言した。

これら二人の友：コーリタとウパティッサとがやって来る。

これは私の両弟子：最高の両賢者となるであろう。」と

（*gambhīre nāṇa-visaye, anuttare upadhi-saṅkhaye; vimutte anuppatte* (^{Vri}*appatte*) *Veḷuvanaṃ, atha ne satthā byākāsi. ete dve saḥāyākā, āgacchanti Kolito Upatisso ca; etaṃ me sāvaka-yugaṃ, bhavissati aggaṃ bhadda-yugaṃ ti*）。』
（*Mvg.I.24.3: Vin.I.p.42*³¹⁻³⁷）

兩人は世尊の許に到り、その両足に倒地の礼をして出家と具足戒を請うて「来たまえ。比丘達よ」云々と許される。ここも先のコンダンニャやカッサバの場合と同じ定型文である（*Mvg.I.24.4: Vin.I.pp.42*³⁷⁻⁴³）。

g 【舍利弗・目連が仏門に入った後の人々の怨嗟や非難とその対処】

『それからなるほど、そのときに、マガダの甚だ著名な良家の息子達が、世尊の許で修行（梵行）をする。人々是不機嫌になり失望し謗る。「沙門ゴータマは子が〔出家して〕いなくなるようにとやって来る。沙門ゴータマは〔夫が出家して〕寡婦になるようにとやって来る。沙門ゴータマは家系を断絶させるためにとやって来る。今や千人の結髮行者達がこれによって出家させられ、またサンジャヤの徒250人の遊行者達が出家させられた。そしてマガダのこれら甚だ著名な良家の息子達が、世尊の許で修行（梵行）をする」と。しかも比丘達を見れば、次の偈をもって非難する。

α 「なるほど、大沙門はマガダ人たちの山城にやって来た。

サンジャヤの徒を皆導き入れて。今や一体誰を導き入れるだろうか。」と

（*āgato kho mahā-samaṇo, Māgadhānaṃ Giri-bbajam; sabbe Saṅjaye* (^{Vri} *Saṅcaye*) *netvāna, kaṃ su dāni nayissati ti*）。』
（*Mvg.I.24.5: Vin.I.43*⁷⁻¹⁷）

比丘達はこのような人々の怨嗟の声を聞いて世尊に言う。世尊は『比丘達よ。その声は長くはないであろう。七日だけはあるであろうが、七日を過ぎると消えるであろう』といい、人々がその偈をもって非難するなら、『お前達は彼らにこの偈をもって反駁しなさい』といって、次の一偈を示す。

β 『まことに大雄である如來は正法（正しいよき教え、道理）をもって導き入れる。法（教え、真実）をもって導き入れる識者達に対して何の嫉妬ぞ。と

（*Nayanti ve Mahā-virā, sad-dhammena tathāgatā;*

Dhammena nayamānāṇaṃ, kā ussyā (^{Vn} usūyā) vijānatan ti)。』
(Mvg.1.24.6: *Vin.I*.p.43²⁷⁻²⁸)

そのようにすると、『人々は釈迦の息子である沙門達は法（よき教え、真実、道理）によって導き入れるのであって、非法（不法、非道、理不尽）によってではないそうだ (manussā dhammena kira samaṇā Sakya-puttiyā nenti no adhammena)』といて、非難する声は七日だけはあったが、七日を過ぎると消えたという (Mvg.1.24.7: *Vin.I*.p.44¹⁻³)。

以上が⑨の伝承である。最後は独身の出家者の宗教教団が抱える社会的な軋轢の問題である。夫婦や親子の情愛と出家修行とが相反する。これは釈尊が故郷を訪ねて父王と旧妻と息子とに直面する伝承でも露呈する問題である (Mvg.1.54: *Vin.I*.pp.82-83, 『五分律』卷17: T.22.116c, 『四分律』卷34: T.22.809c-810b, 『十誦律』卷21: T.23.152c, etc.)。独身・出家の仏教教団がほぼ消滅した現代の日本には忘れられていようが、出家仏教が抱えてきた深刻な問題である。

舍利弗と目連の入門の伝承は⑤資料 (CPS.28, *Mv.III*.pp. 56⁶-67⁷) にもあり、漢訳資料にも多い。⑨伝承と比較的に近い CPS は以上をもって終わっている。(未完)

註

- 1) 根本説一切有部の伝承では、世尊が住んだところは伽耶山という霊場という (Gayā-sīrṣe caitye: CPS.26.2; 『破僧事』卷7: T.24.134b⁴: 其山頂窰堵波處、『衆許摩訶帝經』卷10: T.3.962a¹²: 説耶山頂塔處)。
- 2) 『雜阿含經』卷8 (197) (T.2.Na.99,50bc) では、世尊が神足變化示現と他心示現と教誡示現を示されたという。CPS.26.3 では ṛddhi-prātihārya (超能力を示す奇蹟), ādesanā-prātihārya (他人の心を直指する奇蹟), anuśāsani-prātihārya (教誡める奇蹟) という。『破僧事』卷7 (T.24.134b⁷) では神足通 記説通 教授通。『衆許摩訶帝經』卷10 (T.3.962a¹⁴) では単に神通、説法、調伏。『五分律』卷16 (T.22.109b^{26,27}) では神足教誡、説法教誡、教誡教誡。『四分律』卷33 (T.22.797a¹³⁻¹⁴) では神足教化、憶念教化、説法教化。『中本起經』卷上 (T.4.152a⁶⁻⁸) では神足示現、教授示現、説法示現。そして『佛本行集經』卷42 (T.3.850b²⁷) では身通、口通、意通という。訳語に混乱があるようであるが、同じことを指している。その第三の教誡示現 (anuśāsani-prātihārya, 教授通) の内容が、今の「一切は燃えている」という教えである。なお漢訳には、この説法の時処を同じくしながら、文殊師

利菩薩を始めとする諸菩薩に対して菩薩の修行道・行法を説く4経: T.14, No. 464 文殊師利問菩提經 (一名伽耶山頂經), No.465伽耶山頂經、No.466佛説象頭精舍經、No.467大乘伽耶山頂經が伝えられている。

- 3) D. No.11 Kevaddha-sutta 3-67: I.pp.212¹⁶-215²¹, A.III. 60: vol.I.pp.170¹⁴-172³⁴, 『長阿含經』卷16 (24) 堅固經 (T.1.No.1,101c⁸-102a²⁴ 三神足: 神足・觀察他心神足・教誡神足)。なおここに説かれる仏の3種の奇蹟 (神變、示現) は、アビダルマでも論ぜられ、玄奘訳『俱舍論』卷27では、三種示導または三示導といい、神變示導・記心示導・教誡示導である (T.29.No.1558,143c⁴⁸; cf. *AKBh*.p.424¹⁰⁻¹²)。同じく玄奘訳『大毘婆沙論』卷103でも同様である (T.27.No.1545,532a¹⁶⁻¹⁷)。真谛訳『俱舍釋論』卷20では、三導といい、如意成導・記心導・正教導という (T.29, No.1559,294c¹²)。過去のヴィパシュイン (Vipaśyin, 毘婆尸) 仏を語る⑤本 Mahāvadānasūtra (=MAS.Waldschmidt: 10c.7-8: p.152; 10e.2-3: pp.154-155; Fukita (吹田) pp.148²⁴,150¹²,152^{8,10}) には、その仏が3種の奇蹟 (神變、示導) をもって教える、という文が出ている。しかしそれに対応する⑨文 (D.No.14 Mahāpadāna-suttanta 3.11, 15, 19: D.II.41⁹⁻²¹, 43⁴⁻¹⁶, 44¹⁷⁻²⁹) では、仏は次第説法によって施論・戒論・生天論に始まり四諦に終わる説法を繰り返している。⑨の伝承は3種の奇蹟 (神變、示導) を重視しない。他方、佛陀耶舎共竺佛念譯『長阿含經』卷1「大本經」(T.1.No.1,9a⁶-c²⁰) でも、後の法天訳『毘婆尸佛經』卷下 (T.1.No.3,157a⁴⁻¹⁷, b⁷⁻²¹) でも、仏は次第説法によって聞き手が法眼を得て出家して具足戒を受けた後に、3種の奇蹟 (神變、示導) をもって教えると、聞き手は煩惱がなくなり解脱したという。前者では三事示現または三事教化といい、神足・觀察他心・教誡の3である (T.1.9c^{1-2,18-19})。後者では三種神通または三通といい、變化神通・説法神通・調伏神通の3である (T.1.157a¹⁵⁻¹⁷, b¹⁸⁻¹⁹)。これは奇蹟 (神變) を示し現すのであるが、それによって教え導くことを意味するのである。この中で超能力による奇蹟 (神足變化示現、神變示導) というのは、現実には有り得ないこと (例えば、地に潜ったり、水上を歩いたり、鳥のように空中を移動したり、月や太陽に手で触れるなど) を現す、いわば魔術である。それがどうして可能なかは、私には分からない。ただ、そういうことであっても、実際にあるように思い込ませる人、そしてそれを本当だと思ひ込む人達がいた、ということなのであろう。しかしこのような超能力 (神足、神通) の行使を、実は仏は誡めたと伝えられている (D.I.pp.211¹³⁻¹⁷, 213²¹⁻²³; T.1.No.1,101c²²⁻²³)。これはそのような超能力がいかがわしいことで、その行使が後ろめたいものと思われていた、ということを示唆している。
- 4) CPS.26.21; 『破僧事』卷7 (T.24.134b²³⁻²⁹), 『衆許摩訶帝經』卷10 (T.3.962a²⁹-b²), 『雜阿含經』卷第8 (197) (T.2.50c⁴⁻⁵) 『五分律』卷16 (T.22.109c⁶⁻⁷), 『四分律』卷33 (T.22.797b²⁻³), 『佛本行集經』卷42 (T.3.851a⁷⁻¹³), 『過去現在因果經』

卷4 (T.3.650a²⁸⁻²⁹), 『中本起經』卷上 (T.4.152a¹¹⁻¹²)。

- 5) *Mv.III.p.441*¹⁸では, Anta-girismiṃ udyāne Yaṣṭi-vane という。しかし『佛本行集經』卷44 (T.3.857a¹³⁻¹⁴) では彼杖林之内。是時彼林。別有_二一塔_一。名_二善安住_一。
- 6) (a)は㊦聖典に繰り返される定型文である (*M.I.p.356*³, *S.I.p.219*³¹, *A.I.p. 207*¹⁰, *Sn.p.103*⁷)。通常、如來の十号と呼ばれるが、ここでは文初に如來ではなく世尊が来るので文末の世尊と重複する。なお *D.I.p. 49*¹³では文初が so (かの) ではなく ayaṃ… (この) とあるが、他は全く同文である。『佛本行集經』卷44 (T.3.857a²⁴) では、彼、婆伽婆・阿羅呵・三藐三佛陀・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と明行足を欠くが、同卷52 (T.3.892c²²⁻²⁴) は、婆伽婆・多他阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊、と明行足を加えており、順序は上例のパーリ文に同じい。しかし *CPS.27a.16* (tathāgata utpadyetārhan samyak-sambuddho vidyā-caraṇa-sampannaḥ sugato loka-vid anuttaraḥ puruṣa-damya-sārathiḥ śāstā deva-manuṣyāṇṇaṃ buddho bhagavān), 『破僧事』卷7 (T.24.134c²⁰ : 如來・應・正等覺・明行圓滿・善逝・世間解・無上丈夫・調御士・天人師・佛・薄伽梵), 『衆許摩訶帝經』卷11 (T.3.965a⁷ : 如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊), 『四分律』卷33 (T.22.797b¹⁴ : 如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊), 『普曜經』卷8 (T.3.532b¹⁴ : 如來・至真・等正覺・明行成為・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師・為佛・衆祐) では、如來に始まる。㊦聖典にも如來に始まる仏の異名の列挙がある (*D.I.p. 62*²⁴, *M.I.p.179*¹, *S.III.p.85*¹³, *A.I.p. 168*²⁵, *II.p. 147*⁶, *It.p.78*²² : idha ... tathāgato loka uppajjati araham sammā-sambuddho vijjā-caraṇa-sampanno sugato loka-vidū anuttaro purisa-damma-sārathi satthā deva-manussānaṃ buddho bhagavā. 但し...には呼びかけのことが入ることがある。文初が idha でない例もある)。いずれの伝承においても、応供から世尊までの10の称号とその順序は変わらない。村上・及川『パーリ仏教辞典』(春秋社、2009年) : tathāgata 等、藤田宏達「仏の称号—十号論」(玉城庚四郎博士還暦記念『佛の研究』昭和39年, pp.81-98) 参照。(b)の法(教え)と淨行(梵行)の叙述も繰り返される定型文である (*D.I.p. 62*, *M.I.p.356*, *S.I.p.105*, *IV.p.315*, *A.II.p. 147*, *Sn.p. 103*)。しかし、この関連資料では僅かに『四分律』卷33 (T.22.797b¹⁶ : 於_二天及世間_一久魔若魔天及梵天衆沙門婆羅門衆中自知得_二神通智證_一。常自娛樂。與_二人說_一法。上中下言悉善。義味深遠。具足演布。修_二諸梵行_一) に対応する文がある。
- 7) *CPS.27a.1-c.3*; 『破僧事』卷7 (T.24.134b²⁶-135b⁴), 『衆許摩訶帝經』卷10 (T.3.962b³-962c¹⁹)。釈迦族の太子の誕生について報告し、その殺害を進言する臣下の言葉を王は退けて、その太子が転輪王になるなら自ら臣属し、正覚者になるな

ら、その弟子になろう、という趣旨は、『四分律』卷31 (T.22.779b²⁸-c¹⁰) にもある。

- 8) 『四分律』卷33 (T.22.797b³) : 我先許_二瓶沙王請_一。若我成_二佛得_一一切智_一。先來至_二羅閱城_一。我今應_二往見_一瓶沙王_一; 『五分律』卷16 (T.22.108c⁸) : 吾昔與_二瓶沙王_一要得_二道度_一之。今應_二詣_一彼。便與_二千比丘_一前後圍繞漸漸遊行向_二王舍城_一; 『過去現在因果經』卷4 (T.3.650b¹) : 爾時世尊。心自念言。頻毘娑羅王。往昔於_二我_一有_二約_一誓言_一。道若成者。願先見_二度_一。今日時至。宜應_二往彼滿_一其本願_一。
- 9) 村上・及川『仏のことば註(三)』(春秋社 1998年) pp.3-33、特にp.15参照。
- 10) *CPS.27c.4-15*; 『破僧事』卷7 (T.24.135b¹⁴⁻²⁸), 『衆許摩訶帝經』卷10 (T.3.962c¹⁹-963a¹⁵), 『過去現在因果經』卷4 (T.3.650b²³-c⁴)。以上4者では、王が『私はマガダ王 Śraṇya Bimbisāra 王です』と名乗り、世尊が『そうです。貴方はッ』と繰り返す。*Mvg.1.22.3*の趣旨は『四分律』卷33 (T.22.797b²⁰⁻²⁸), 『五分律』卷16 (T.22.109c¹¹⁻¹³), 『毘尼母經』卷5 (T.24.827b¹⁻⁵), 『中阿含經』卷11 (62)「頻鞞娑邏王迎佛經」(T.1.497b⁹-c¹), 『頻婆娑羅王經』(T.1.825b⁵⁻²⁰), 『雜阿含經』卷38 (T.2.279a¹⁷⁻²⁸), 『別譯雜阿含經』卷1 (13) (T.2.377a¹⁹⁻²⁷), 『佛本行集經』卷44 (T.3.857b⁶-c²²), 『方廣大莊嚴經』卷12 (T.3.612c¹²⁻²¹), 『普曜經』卷8 (T.3.532b²⁰-c¹³) 等にも見られる。*Lal.*には相当文がない。
- 11) マガダ王の帰依の節の偈頌について、宮坂宥勝「Urubilvā-prāthihārya の偈頌の伝承形態」(『インド古典論』上、筑摩書房、昭和58年, pp.(43)-(71))は、諸伝承における11種の偈を比較対照して示し、㊦と共通する4偈が、上座部にも大衆部にも粗同じ形態で伝えられたから部派分裂以前に遡ると見る。㊦*CPS.27c.19-22*=*SBV.I.p.155*¹²⁻²⁷の4偈、及び *Mv.III.pp. 444*^{8-11,13-16,18-21}, *445*²⁻⁵の4偈の意味が㊦偈にほぼ対応するが、以下の和訳と原文で見るように、語順も単語も㊦とは相当に異なる(原文波線部は㊦と対応する語)。
- a 『[世尊]「ウルヴィルヴァーに住む者よ。瘦せた論者(貴方)は何をば見て祭火を捨てているのか。K.(カーシュヤバ、迦葉)よ。この意味を貴方に問う。どうして貴方の火祭りが捨てられたのか。』
- kim eva dr̥ṣṭvā Uruvilva-vāsi, pahāya agniṃ kṛṣako vadāno/
prcchāmi te Kāśyapa etam artham, katham pahinaṃ tava agnihotram//
(*Mv.III.p. 444*⁸⁻¹¹)
- 『[ウルヴィルヴァーに住む者よ。ここに貴方は何をば見て祭火と聖なる掟を捨てたのか。K.(迦葉)よ。この意味を私に言え。どうして貴方の火祭りが捨てられたのか。』
- dr̥ṣṭvēha kiṃ tvam Uruvilva-vāsin, agniṃ ahāsir vratam eva cārṣam/
ācakṣva me Kāśyapa, etam artham katham prahinaṃ hi tavāgni-hotram//

(CPS.27c19; SBV.I.p.155¹²⁻¹⁵)

b 『[K.]「食べ物と飲み物とそれから味、欲しいもの、そして女を、供犠において語る。これらは垢だと、〔執着の〕依り所 (=祭祀) の中に知って、それ故に供犠や献供を喜ばない。』

annāni pānāni atho rasāni kāmāṃ striyo cābhivadānti yajñe/
etāṃ malan ti upadhiṣu jñatvā tasmān na yajñe na hute ramāmi// (Mv.III.p. 444¹³⁻¹⁶)

『「食べ物と飲み物とそれから味と、欲しいもの、そして女とを、或る人達は言う。これは垢だと、〔執着の〕依り所 (=祭祀) の中に見て、それ故に供犠や献供を私は喜ばない。』

annāni pānāni tathā rasāṃś ca, kāmān striyaś caiva vacanti haike/
etāṃ (SBV. tāvan) malan ti upadhau samprapaśyaṃś (SBV. śyan)
tasmān na yaṣṭe (SBV. iṣṭe) na hute rato 'ham//
(CPS.27c20; SBV.I.pp.155¹⁶⁻¹⁹)

c 『[世尊]「また貴方は、これら食べ物と飲み物とそれから味に、こころを寄せなかった。さらに一体、かの神々や人々の最上者を貴方のこころは喜ぶのか。K.よ。私にそれを言え。』

eteṣu tvam na mano akāsi anneṣu pāneṣu tathā raseṣu/ aparaṃ nu taṃ deva-manuṣya-śreṣṭhaṃ ya hiṃ ratam Kāśyapa tuhya cittam// (Mv.III.p. 444¹⁸⁻²¹)

『「もし貴方が、ここに欲しいものや食べ物と飲み物とそれから味に、こころ喜ばないなら、一体どのように神々や人々の世間において、こころが喜ぶのか。K.よ。問われては言え。』

na te 'tra kāmēṣu mano ratam ced anneṣu pāneṣu tathā raseṣu/
kathan nu te deva-manuṣya-loke ratam manah Kāśyapa brūhi prṣṭah//
(CPS.27c21; SBV.I.pp.155²⁰⁻²³)

d 『[K.]「執着の依り所のない寂靜なる牟尼を見て、無所有にして一切の生存に執られられない・別様にはならない・他によっては導かれない〔牟尼を見て〕、それ故に私は祭祀や献供を喜ばない。』

drṣtvā munim śāntam anupadhikam/ akimcanam sarva-bhaveṣv asaktam/
ananyathā-bhāvam ananya-neyam/ tasmā na yaṣṭe na hute ramāmi//
(Mv.III.p. 445²⁻⁵)

『「執着の依り所のない寂靜なる最高の境地を見て、無所有にして欲の生存に執られられない・別様にはならない・他によっては導かれない〔境地を見て〕、それ故に私は祭祀や献供を喜ばない。』

drṣtvā padam nirupadhi śāntim (SBV. śāntam) agryam/

akimcanyam kāmā-bhaveṣv asaktam/ ananyathā-bhāvam ananya-neyam/
tasmā na yaṣṭe na hute rato 'ham// (CPS.27c22; SBV.I.pp.155²⁴⁻²⁷)

また⑤ 資料において追加された偈は、以下のようである（その順序は宮坂に倣う）。対応する漢訳文とチベット訳文については、宮坂論文を参照して頂きたい。

e 『[世尊]「空しく貴方は祭火を祭り、空しく貴方はかの苦行をしてきた。それを最後の時に、蛇が旧皮を〔捨てる〕ように捨てるとは。』

mohan te juhito agni mohan te so tapo kṛto/

yaṃ jahe paścime kāle jirṇāṃ va urago tvacaṃ// (Mv.III.p. 445⁶⁻⁸)

f 『[K.]「空しく私等は祭火を祭り、空しく私はかの苦行をしてきた。それを最後の時に、蛇が旧皮を〔捨てる〕ように捨てるとは。』

mohaṃ no juhito agni mohaṃ me so tapo kṛto/

yaṃ yaje paścime kāle jirṇāṃ va urago tvacaṃ// (Mv.III.p. 445⁹⁻¹¹)

g 『祭火により供犠において解脱するのだと、私は知らないから、思っていた。盲で生死に随い、最高の不死の境地を見ないので。』

agnihī yajñeṣu ca vipramuccati iti sma me āsi pure ajānato /

andhasya jāti-maraṇānūsāriṇo apaśyato uttamam acyutaṃ padam//
(Mv.III.p. 445¹²⁻¹⁵)

『供犠により掟により、また祭火によって解脱があるのだという心の計らいが私にありました。私は盲で生死に随い、最高の不死の境地を見ないでいました。』

yajñair vratair agnibhiś cāpi mokṣaḥ ity api abhūn me manaso vitarkaḥ/
andho 'smi jāti-(SBV. jāti-) maraṇānūsāri anikṣmāno 'cyutam uttamaṃ padam//
(CPS.27c23; SBV.I.pp.155²⁸⁻¹⁵⁶)

h 『今やその私は、優れた龍であるそのようなお方によってよく示された、かの濁りなき境地を見ます。究極の拠り所である境地に私は触れました。輪廻・生死をば捨てて。』

so dāni tad paśyāmi anāvilam padam sudeśitam nāga-vareṇa tāyinā/ atyanta-niṣṭhā-padam āsprṣe aham saṃsāra-jāti-maraṇam prahāya// (Mv.III.p. 445¹⁶⁻¹⁹)

『今や私は、優れた龍であるそのようなお方によってよく示された、かの無為の境地を見ます。ガウタマよ。大衆の利益のために・真実に勇猛な牟尼・導師なる貴方が現れました。』

paśyāmidānim tad asaṃskṛtaṃ padam sudeśitam nāga-vareṇa tāyinā/
mahā-janārhāya munir vināyakaḥ tvam udgato Gautama satya-vikramaḥ//
(CPS.27c24; SBV.I.p.156²⁻⁵)

i 『[世尊]「貴方はよく来られた。よく決心された。これは貴方が悪く考えたことではない。種々区分された諸の教法（宗教的主義主張）の中で最勝のものに貴方は

到達しました。K.よ。〔皆の〕衆を驚かせ。』と』

svāgataṃ te vyavasitaṃ naitad duścintitaṃ tvayā/

pravibhakteṣu dharmeṣu yac chreṣṭhaṃ tad upāgama//

saṃvejaya Kāśyapa paṇṣadam iti (CPS.27c25; SBV.I.p.156⁷⁻⁸)

j 『[K.]「多くの有情は損なわれます。種々の苦行を行って、〔究極の〕拠り所に到達することなく、疑いを越えることなく。』

bahu satvā vihananti karontā vividhāṃ tapāṃ/

niṣṭhāṃ anadhigacchantā avitirṇa-kathaṃkathā/ (Mv.III.p. 445²⁰⁻²¹)

k 私は長い間、見解の束縛に結ばれて、汚れていたのです。あらゆるわだかまり(結縛)にあった私を、慧眼を具えた世尊は解放してくれました。』

dirgha-rātraṃ kiliṣṭo smi drṣṭi-saṃdāna-saṃdito/

sarva-grantheṣu me bhagavāṃ parimocasi cakṣmāṃ (Mv.III.p. 446¹⁻²)

- 12) 若人壽百歳 奉_レ火修_二異術_一 不_レ如_レ尊_二正諦_一 其明照_二一切_一 若人壽百歳 學_レ邪志_二不善_一 不_レ如_レ生_二一日_一 精進受_二正法_一 (T.4.152c²⁻⁵)

- 13) 以上の簡略な要旨だけは、『四分律』巻33 (T.22.797b²⁰-798a¹)；『五分律』巻16 (T.22.110a²²⁻²⁴)；『毘尼母經』巻5 (T.24.827c¹⁻⁵)に見られる。⑩とほぼ同じ趣旨は、『佛本行集經』巻44 (T.3. 858b¹⁶-c¹¹)と『中阿含經』巻11 (62)『頻鞞娑邏王迎佛經』(T.1.498a¹¹-c²⁵)に見られる。CPS.27e.1-f.20≡SBV.I.pp.157⁹-160¹⁹；『破僧事』巻7 (T.24.136a⁷-c²⁰)；『衆許摩訶帝經』巻10-11 (T.3.963b²⁹-964b¹³)は、次第説法ではなく、直ちに色・受・想・行・識の生・滅、非我、非我所、十二縁起の生觀と滅觀、色・受・想・行・識の無常・苦・非我・非我所を觀じて解脱する、と教える。すると、王を初め聴衆は遠塵離垢し法眼淨を得たという。Mv.III.p.446⁹-449¹⁰も同趣旨であるが、説法は十二縁起までで終わっている。『過去現在因果經』巻4 (T.3.651a²⁰-b²⁵)も同様であるが十二縁起には触れない。また『頻婆娑羅王經』(T.1.826a³-c¹⁰)；『方廣大莊嚴經』巻12 (T.3.613a¹⁶-b¹⁵)、『普曜經』巻8 (T.3.533a⁸-b¹⁷)にもその趣旨が見られる。Lal.には相当分がない。

- 14) 「諸法考(5)註4 参照。『佛本行集經』巻44は前註13に続く文脈において有る師の言として、「復有師言。凡有_二十二那由他人_一。遠塵離垢。盡_二煩惱界_一。心得_二清淨_一。於_二諸法中_一。生_二淨法眼_一。可_レ有_二集法_一 皆是滅相_一。如實證知」(T.3.858b⁸-c¹)という。この「有る師」とは、⑩と同じ伝承を知っている師であろう。⑤文にはPramāṇavārttika (=PV.) II.285bc に yat kiñcid udayātmakam nirodha-dharmakam sarvaṃ tad [村上訳：およそ何でも生起する本性があるものは、すべて滅する性質(本性、法)がある]とある。

- 15) これによく対応する漢訳文は、『佛本行集經』巻44 (T.3. 858c⁷-c¹¹)：爾時摩伽陀王頻頭婆羅。已見_二法相_一。已知_二法相_一。已入_二法相_一。於_二法相中_一。已度_二諸疑_一。

徹_レ過無_レ礙_レ於_二諸法中_一。無_レ復礙心_一已得_二無畏_一。世尊法中。不_レ復隨_レ他。不_レ復問_レ他。一切法中。得_二如是知_一自在無礙_一。時頻頭王。即白_レ佛言。

- 16) ⑩と同じ文脈で王の五願を語るの、『佛本行集經』巻44 (T.3.858c¹¹⁻²⁴)である。『四分律』巻33 (T.22.798a⁴⁻⁸)では六願となっている。王の五願は、CPS.27a.14：『破僧事』巻7 (T.24.134c¹⁹-23)と『衆許摩訶帝經』巻10：T.3.962b¹⁹⁻²³では、王が仏を訪ねる前に述べられるが、王位継承の願はなく、代わりに最後に戒を受持する願を述べている。

- 17) この文は Mvg.I.7.10: Vin.I.p.16³¹⁻³⁵と同文、「諸法考(4)：『仏教研究』37号」pp.97-98に符号Fを冠して和訳文と原文を示しておいた。なお「Fのみは、他に類文が殆ど伝えられていないようである」と付記しておいた。⑤ 資料や漢訳等に類文が見つからないということである。今のマガダ王の場合においても事情は同じである。

- 18) CPS.27f.25はここで終わり、28a.からは舍利弗・目連が仏門に入る物語となる。

- 19) ⑩註釈には「『十に住し』とは十聖住に住しきり、「十法を知り」とは十の業道を知り、「十を具え」とは、十無学支を具えた (dasa-vāso ti dasasu ariya-vāsesu vuttha-vāso. dasa-dhamma-vidū ti dasa-kamma-patha-vidū. dasabhi c'upeto ti dasahi asekkhehi aṅgehi upeto)』(PTS.VinA.V. 973, Vri.244)とある。その詳しい説明はこの複註 (VinA-ṭīkā=Sārattha-dīpanī-ṭīkā, Vri. 3.195-204)にある。但し「十の業道」の説明はない。それは十不善業道 (dasa akusalā kamma-pathā)と、それらを否定しそれらから離れる十善業道 (dasa kusalā kamma-pathā)を指すであろう。即ち十不善業道とは、殺生 (pāṇātipāto)、偷盗 (与えられない物を取る事 adinnādānaṃ)、邪淫 (性欲に関する間違った行動 kāmesu micchācāro)、妄語 (musā-vādo)、中傷 (両舌、陰口 pisunā vācā)、粗語 (乱暴なことば pharusā vācā)、無用のお喋り (綺語 sampha-ppalāpo)、貪欲 (abhihiṇṇā)、害意 (瞋恚 byāpādo)、邪見 (間違った見解 micchā-diṭṭhi)の十である。十善業道は、殺生 乃至、無用のお喋り (綺語)からそれぞれ離れること (veramaṇi)、及び 不貪欲 (anabhihiṇṇā)、無害意 (不瞋恚 abyāpādo)、正見 (正しい見解 sammā-diṭṭhi)の十である (D.33.Saṅgiti-suttanta 3.3.3-4 : D.III.p.269¹⁻⁹)。そしてその他も D.33.Saṅgiti-suttanta 3.3 (D.III.pp.266ff.)及び、D.34.Dasuttara-suttanta 2.3 (D.III.290ff.)から説明される。要点のみを示すと、十聖住 (十種の聖なる住し方)とは、『友よ。ここに比丘が五つの〔悪〕属性が捨てられており (pañcaṅga-vippahino hoti)、六つの〔好〕属性を具え (chaḷaṅga-samannāgato)、一つを守り (ekārakkho)、四つ (食・住・業・衣)に依存し (catur-āpasseno)、銘々の真実を除き去り (paṇunna-pacceka-sacco)、欲求をすっかり捨て (samavaya-saṭṭhesano)、思いに濁りなく (anāvila-saṅkappo)、身の衝動力が静まり (passaddha-kāya-saṅkhāro)、心がよく解脱し (suvimutta-

citto)、よく解脱した智慧がある (suvimutta-pañño)』(D.III.269¹⁰⁻¹⁴) とあり、その五つの〔悪〕属性が捨てられている、とは、五蓋 (pañca nivarāṇāni) という煩惱 (悪い心) が捨てられていること：すなわち『欲しいものへの欲 (欲貪 kāmaccando)、悪意 (瞋恚 byāpādo)、鬱状・眠気 (昏沈睡眠 thīna-middham)、躁状・後悔 (掉挙・悪作 uddhacca-kukuccam)、疑い (vicikicchā) が捨てられている』(D.III.269¹⁵⁻¹⁹)。六つの〔好〕属性を具えているとは、『眼で色を見ても心地よくもなく心地悪くもなく無関心で思い知って過ごし、耳で声を聞いても、鼻で香をかいでも、舌で味を味わっても、身で触れるものに触れても、意で法を認識しても、心地よくもなく心地悪くもなく無関心で思い知って過ごしている (manasā dhammaṃ viññāya neva sumano hoti na dummano, upekkhako viharati sato sampajāno)』(D.III.269²⁰⁻²⁶) という。一つを護りとは、『比丘が思念を護る心を具えている (satārakkhena cetasā samannāgato hoti)』(D.III.269²⁸⁻²⁹) という。四つ (食・住・薬・衣) に依存しとは、『省察して一つを用い、〃忍受し、〃除き、〃避ける (saṅkhāy'ekam paṭisevati, 〃adhivāseti, 〃vinodeti, 〃parivajjeti)』(D.III.270²) という。十力とは、同複註 (VinA-ṭīkā, Vri. 3.198-203) によると、如來には身力 (体力) と智力との二種の十力があるという。先ず『その中で身力 (体力) は象の系統 (家系) に従って知られる (Tesu kāya-balaṃ hatthi-kulānusārena veditabbaṃ) という。象には「黒劣〔系統〕 (kālavakam)」、**「恒河〔系統〕 (gaṅgeyyam)」、**「灰白〔系統〕 (paṇṇaram)」、**「赤銅〔系統〕 (tambam)」、**「褐色〔系統〕 (piṅgalam)」、**「芳香〔系統〕 (gandham)」、**「吉祥〔系統〕 (maṅgalam)」、**「黄金〔系統〕 (hemam)」、**「齋戒〔系統〕 (uposatham)」、**「六牙〔系統〕 (chaddantam)」という十種の家系 (種類) があり、黒劣〔系統〕の象が普通の象の系統 (pakati-hatthi-kulam) であって、その黒劣〔系統〕の象の力は十人力であるという。それ以下の系統の象はそれぞれ前の象の十倍の力があり、最高の六牙〔系統〕の象の十倍が一如來の力であるという。『まさにこの〔如來の力〕こそは、**ナーラーヤナの集合 (身) の力**とも言われる (Nārāyana-saṅghāta-balan ti pi idam eva vuccati)。そこでナーラーとは諸々の光線が言われる (Tattha nārā vuccanti rasmiyo)」、それら種々の種類の光線がそこから生じるといふわけで、ナーラーヤナ (那羅延、光輝く) であり、金剛である (tā bahū nānā-vidhā tato uppajjanti ti nārāyanam, vajiram)。それゆえに〔如來の力〕は**金剛の集合 (身) の力**であるという意味である (tasmā vajira-saṅghāta-balan-ti attho)。そこでこの〔如來の力〕は普通の象で数えると百億の象の〔力〕であり、人 (男) で数えると千億の人力である (Tad etaṃ pakati-hatthi-gaṇanāya hatthinam koṭi-sahassānam, purisa-gaṇanāya dasannam purisa-koṭi-sahassānam balaṃ hoti)。先ずこれが如來の身力 (体力) である (Idam tāva tathāgatassa kāya-******************

balaṃ)』(VinA-ṭīkā, Vri. 3.198-199)。以上の文は PTS.MA.II.p.26,Vri.I.338 及び PTS.AA.V.p.10, Vri.3.292 とほぼ同趣旨であるが、より詳しい。漢訳では曇無讖譯『大般涅槃經』卷11 (T.12,No.374, p.429b)、慧嚴等編『大般涅槃經』卷10 (T.12, No.375, p.670c)、鳩摩羅什譯『集一切福德三昧經』卷上 (T.12, No.382,p.989c) にやや類似の文が認められる。この他にも大乘經典においては仏・菩薩の身が那羅延身と呼ばれる例は多い (T.12, No.360『無量壽經』卷上 p.268b²³, No.382『集一切福德三昧經』卷上 p.989c², T.17,No.761『法集經』卷 pp.626a²⁹, 649a³)。ナーラーヤナは一般にはヴィシュヌ神と考えられるが、以上においてはその神との関連は明示されない。次に智力とは**如來十力** (dasa tathāgata-balāni) であり、仏＝如來のみが有するという十種の智慧の力である。同複註は先ず世尊が舍利弗に説く經文 (Vri.M. 1.148, PTS. M.I.pp.69³¹-71¹⁸) を引く (A. 10.21: PTS. A.V.pp.33⁷-36¹⁶もほぼ同文で、仏が比丘達に説く經文である)。以下はその要点。『(1) 如來は 処 (因果の道理) を 処 (因果の道理) から、また非処 (非道理) を 非処 (非道理) から有りのままに知る (tathāgato ṭhānaṃ ca ṭhānato aṭṭhānaṃ ca aṭṭhānato yathā-bhūtaṃ pajānāti)。(2) 如來は過去・未來・現在の業が受け取るものごとの報いを道理から原因から有りのままに知る (tathāgato atitānāgata-paccuppannānaṃ kamma-samādānānaṃ ṭhānaso hetuso vipākaṃ yathā-bhūtaṃ pajānāti)。(3) 如來は全ての処 (輪廻の境遇と涅槃) に行く道を有りのままに知る (tathāgato sabbattha-gāminiṃ paṭipadaṃ yathā-bhūtaṃ pajānāti)。(4) 如來は多くの界 (要素・領域) ・種々の界 (要素・領域) を持つ世間 (自分の存在の領分) を有りのままに知る (tathāgato aneka-dhātuṃ nānā-dhātuṃ lokaṃ yathā-bhūtaṃ pajānāti)。(5) 如來は衆生達に種々の意向があることを有りのままに知る (tathāgato sattānaṃ nānādhimuttikataṃ yathā-bhūtaṃ pajānāti) (6)。如來は他の衆生達・他の人達に能力 (根) の上下があることを有りのままに知る (tathāgato para-sattānaṃ para-puggalānaṃ indriya-paropariyattaṃ yathā-bhūtaṃ pajānāti)。(7) 如來は瞑想 (禪、静慮) ・解脱・心統一 (三昧) ・入定 (等至) の汚染と浄化と出定を有りのままに知る (tathāgato jhāna-vimokkha-samādhī-samāpattinaṃ saṃkilesaṃ vodānaṃ vuṭṭhānaṃ yathā-bhūtaṃ pajānāti)。(8) 如來は種々に定められた前世の住所を想起する (tathāgato aneka-vihitaṃ pubbe- nivāsaṃ anussarati)。(9) 如來は神的な超人的な清浄な眼 (天眼) をもって衆生達が死没し再生するのを見る。劣った・優れた・美しい・醜い・善く逝った・悪く逝った衆生たちが、業のままに行くのを知る (tathāgato dibbena cakkhunā visuddhena atikkanta-mānusakena satte passati cavamāne upapajjamāne hīne paṇīte suvaṇṇe dubbaṇṇe sugate duggate, yathā-kammūpage satte pajānāti)。(10) 如來は漏 (煩惱) が尽きるから無漏の

心解脱・慧解脱をまさにこの現実において自ら悟って体得してそなえもって住する (tathāgato āsavāṇaṃ khayā anāsavaṃ ceto-vimuttiṃ paññā-vimuttiṃ diṭṭh'eva dhamme sayaṃ abhiññā sacchikatvā upasampajja viharati) (*VinA-ṭīkā*, Vri. 3.199-201, PTS. *M.I*pp.69³¹- 71¹⁸抜粋)。『雜阿含經』卷26 (684) : *T.2.No.99, 186c*¹⁶-187b⁴, 『增壹阿含經』卷41 (結禁品第 46.4) : *T.2.No.125, 776b*¹⁵-c²⁰に相当文がある。玄奘訳『俱舍論卷27』*T.29. No.1558, 140b*⁹⁻¹⁷では簡略に處非處智力、業異熟智力、靜慮解脱等持等至智力、根上下智力、種種勝解智力、種種界智力、遍趣行智力、宿住隨念智力、死生智力、漏盡智力と示されている (Cf. *AKBh.* pp.411¹²-412⁹)。

十無学支 (無学即ち修学すべきことが無い〔聖者の〕10種の要件) とは、十無学法 (dasa asekkhā dhammā 修学すべきことが無い十種の属性=要件) であり、それぞれ修学すべきことが無い〔聖者 (無学) の〕正見、正思、正語、正業、正命、正勤、正念、正定、正智、正解脱である (asekkhā sammā-diṭṭhi, asekkho sammā-saṅkappo, asekkhā sammā-vācā, asekkho sammā-kammanto, asekkho sammā-ājīvo, asekkho sammā-vāyāmo, asekkhā sammā-sati, asekkho sammā-samādhi, asekkhā sammā-ñāṇaṃ, asekkhā sammā-vimutti *D.III*p.271⁵⁻⁹)。『長阿含』(9)「衆集經」(*T.1.52c*⁷⁻⁸) には、無學正見、正思、正語、正業、正命、正念、正方便、正定、正智、正解脱とあるが、同經(10)「十上經」(*T.1.57b*²⁰⁻²¹) には、無學正見、正思、正語、正業、正命、正方便、正念、正定、正解脱、正智とある。『集異門足論』卷20 (*T.26.452c*11ff.) には、一無學正見。二無學正思惟。三無學正語。四無學正業。五無學正命。六無學正勤。七無學正念。八無學正定。九無學正解脱。十無學正智とある。順序と内容に小異がある。

- 20) 『佛本行集經』卷44 (*T.3.860a*²⁴-860b⁴) には、帝釋天王が摩那婆身 (バラモン学生) の姿になって、王舍城に向かう仏と比丘大衆の前を行きながら説く 5 偈 (7 言 10 句) と、人々の疑問の声に応じて述べる 2 偈 (7 言 8 句) がある。ともにほぼ ㊦の趣旨に対応する。『四分律』卷33 (*T.22.798a*²⁵-798b⁹) には摩竭國人が尋ねる 1 偈 (5 言 4 句) と釋提桓因 (帝釋天) が答える 5 偈 (5 言 10 句) とがある。後の 5 偈は㊦の q の趣旨を詳しく述べたような内容である。『五分律』卷16 (*T.22.109c*¹⁹⁻²³) には摩竭人の問いの 1 偈と釋提桓因が答える 1 偈だけである。後者は㊦の q に対応する。
- 21) ここは *SBV.I*.166¹⁻¹²; 『破僧事』卷 8 (*T.24.138b*⁵⁻¹⁰) ; 『衆許摩訶帝經』卷10 (*T.3.965c*²⁶-966a⁷)、『過去現在因果經』卷 4 (*T.3.651c*¹¹⁻²⁶) と対応する。『四分律』卷33 (*T.22.798b*¹⁰⁻²⁴) と『五分律』卷16 (*T.22.110a*²⁸-b⁶) は、仏が改めて王をして竹園を四方僧に施させる。王が竹園を寄進したことに対して、世尊は祝福 (呪願) を与えた、という伝承があ

る。『破僧事』卷 8 : *T.24.138b*¹¹⁻¹³ : 時佛世尊即說 呪願頌 曰 所 為 布施 者 必獲 其義利 為 利樂 布施 後必得 安樂 (= *T.24.125b*²⁹ : *SBV.I*p.124¹¹⁻¹⁴ : bhagavāṃ ... tad dānaṃ anayā abhyanumodanayā abhyanumodate: yad-arthaṃ diyate dānaṃ tad-arthāya bhaviṣyati/ sukhārthaṃ diyate dānaṃ tat sukhāya bhaviṣyati/... Cf. *CPS.3.10-13.*) ; 『四分律』卷33 : *T.22.798b*²³⁻²⁸ : 時世尊。以 慈愍心 受 彼園 已。即為 呪願 種植 諸園樹 并作 橋船梁 園果諸浴池 及施 人居止 如 是之人等 晝夜福增長 持 戒順 正法 彼人得 生 天 ; 『五分律』卷 16 : *T.22.110b*⁴⁻⁵ : 為說 隨喜 呪願 偈。如 為 毘蘭若 所 說 (Cf. 同卷 1 : *T.22.2b*⁴⁻¹¹ : 隨喜偈) ; 『佛本行集經』卷44 : *T.3.860c*¹¹⁻¹⁵ : 而 呪願言 一切樹木雜園林 并 造 作諸橋等 渠池井泉以充濟 船來去度 衆人 彼等恒於 晝夜中 福報日增長 無 絕 行 法持 戒人亦爾 信敬堅固即生 天 ; 『過去現在因果經』卷 4 : *T.3.651c*²⁷-652a⁵ : 說 偈 呪願 若人能布施 斷 除於慳貪 若人能忍辱 永離 於瞋恚 若人能造 善 則遠 於愚癡 能具 此三行 速至 般涅槃 若有 貧窮人 無 財可 布施 見 他修 施時 而生 隨喜心 隨喜之福報 與 施等無 異。この呪願 (abhyanumodanā, 祝福、隨喜) とは、布施によって福德 (功德) が積まれ樂を得るという趣旨で祝福する。『方廣大莊嚴經』卷12 (*T.3.613b*²⁵⁻²⁹) と『普曜經』卷 8 (*T.3.533b*²⁷-c⁴) とでは、竹園を寄進したのは王ではなくマガダ国の長者カランダ (迦蘭陀、迦陵) であり、それを受けて仏は呪願を述べたという。但し呪願の文句は出ていない。

- 22) *CPS. 28b.1-3; Mv.III. pp.59*³;
- 23) Vidhushekhara Bhattacharya ed. *The Yogācārabhūmi of Ācārya Asaṅga*, Calcutta 1957, pp.118¹¹, 149² に原語が出ている。矯乱の矯は「体をくねらせて、こびを含むさま、女がしなやかにからだをくねらせること」(藤堂明保『学研 漢和大辞典』学習研究社1978) の意であることに困むなら、「不死矯乱論」も名訳かもしれない。Hata Masatoshi (畑昌利), On *amarāvikkhepa* (『印佛研』LVII-3, 2009, pp.1193-98, 1419-20) は、後代のチベット資料などをも検討して、この語を「際限ない〔言葉による〕ごまかし」endless equivocation とする。これは amara を「際限ない」と解するものである。但しその立言が際限のないごまかしではない。4 類16種の判断 (命題) の可否を問われても、その一々に対して「そうとも私には思えない…」云々と 5 種の言い方で否定を繰り返したに過ぎない。際限もあり、ごまかしもないが、その立言は結局は判断停止 (判断保留) に帰するのであり、いわば一種の不可知論というべきであろう。
- 24) この文については、前註14及び「諸法考(5)註 4 参照。


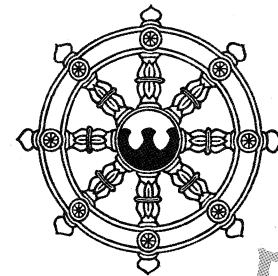
キーワード 法 dhamma 縁起 教団形成 詭弁論



佛教研究

第39号

平成23年 3 月



國際佛教徒協會